

悩まなくてもだいじょうぶ



知っておきたい アレルギーの話

NPO法人アレルギーを考える母の会
代表 園部まり子

イラスト／清水直子



第3回

喘息と新型インフルエンザ

★ 喘息をしつかりと

「コントロールすることが大事

秋は喘息のお子さんにとって最も発作を起こしやすい心配な季節です。加えて今年には新型インフルエンザが流行しています。喘息などの基礎疾患がある人は、インフルエンザに感染した場合に肺炎などを併発したり重症化するリスクが高いとされているので、いつにも増して不安な日々を送っています。でも大丈夫、小児アレルギーの専門医は、「こういう時こそ必要な薬をいつも以上にきちんと使い、喘息をしつかりとコントロールしておくことが大事」(国立成育医療センター総合診療部小児期診療科医長の赤澤晃先生)と、エールを送ってくれています。

「母の会」の講演会で、赤澤先生が分かりやすく教えてくれたことがあります。喘息の考え方や薬による治療は、大きく進歩したそうです。かつては「発作が起きている時だけが喘息で、あとは治っている」、だから治療も発作を止める「対症療法」が中心だった、ところが喘息の解明が進み、今では「気管支の慢性的な炎症が喘息の姿。刺激を受けて発作が起る」ので「発作がない時も慢性的な炎症をなくす継続的な治療が必要」と教えてくれました。発作を止める治療から、発作を起さない治療へと変わったのです。

★ 自分の判断で薬を

やめてしまう人が心配

喘息の子どもの多くは、発作

を止める薬と、発作がない時も使う慢性的な炎症をしずめる薬の二種類を処方されています。この二つの薬の違いを理解して指導通りに使うことが大事なのに、「発作が起きなくなったから、もう薬はいらないだろう」と勝手にやめてしまう人がたくさんいます。気管支の炎症が残っている、そんな時にインフルエンザにかかったら重症化しかねません。赤澤先生はそのことを教えてくれているのだと思います。

わが家の次男は、もう五年以上、発作を起していません。でも気道の過敏性を調べるとまだ炎症は残っていることが分かります。炎症をしずめる薬を普段からしつかりと使うことで、風邪をひいても全く発作は起きない生活を続けています。



そのべ・まりこ ●神奈川県社会福祉協議会セルフヘルプ支援事業運営委員。困っている患者と専門医との橋渡しを第一に「治療ガイドライン」情報などの提供、専門医による講演会や会報発行、行政への働きかけを行なっている。共著に『食物アレルギーの手びき 改訂第2版』(南江堂刊)。